

岡地文子全集

第九卷

田
地
文
子
全
集

第
九
卷



新 潮 社

第六回配本(全十六卷)

円地文子全集 第九卷

定価三三〇〇円

昭和五十三年二月十五日 印刷
昭和五十三年二月二十日 発行

著者 円地文子 © Fumiko Enchi, Printed in Japan 1978.

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

郵便番号一六二一 東京都新宿区矢来町七一

業務部 東京〇三三二六六一五一

電話 編集部 東京〇三三二六六一五四二一

振替 東京四一八〇八番

印刷所 東洋印刷株式会社

製本所 神田加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。
送料小社負担にてお取替えいたします。

円地文字全集 第九卷 目次

雪 鹿 女
燃 島 の
え 綺 繭

501 373 263 7

田下文子全集 第九卷

女の繭

祇園囃子

京都の夏にしては涼しく風の渡る宵であった。

満月に近い月が東山の背をぬいて、雲のない空に清らかに照っていたが、町は祇園祭を明日にした宵宮の雑沓にざわめき立って、人の背に縫いつけられたように押されながら、飾られた鉦や山を見ようと同じ方角へ足を運んで行くブラウスやワイシャツ、浴衣など一色に白い人群れの誰一人、空を見上げている者はなかった。

町々のところどころに杉なりに高くかけ連ねた提灯の長い丸みが細い骨の張りを通して、灯を透かせた紙を明るい白さにふくらませている。

「あの提灯の中にひどく幸福なものがあるように見えたのよ。子供の時って馬鹿なものねえ」

佳世ははぐれないように手を組んで歩いている米良寿夫

の横顔に向けて話しかけた。米良は佳世と美術大学図案科以来の親しい友達であるが、北海道生れで、祇園会にははじめてだった。恰度大阪に新しく出来るビルディングの室内装飾が彼の属している富塚工房に任されたので、米良も仕事に來たついでに、これも東京から京都の叔父の家に帰省している菱川佳世を訪ねて來た。それが今日の午後だったのである。

米良は人波にもまれながら、珍しくてたまらないように提灯や、鉦や、鉦の上層の屋台に鈴なりに居並んで、祇園囃子を囃している揃いの浴衣の氏子たちを眺めていたが、佳世の言葉には流石に耳をあげていたらしく、

「山の彼方の空遠くじゃなくって……提灯の中に幸い住むというか。なかなかいいじゃないか。やっぱり君は伝統のある都の女だよ」

といった。

「厭なこと言わないでよ。私は京都に生れたことに始終腹

を立てているのよ。あなたのように一日中歩いても人に逢わないような、広い野原や原始林に蔽われた山を近くに見て育って来た北海道生れの方が余程任せだわ」

「いや、僕から見ると、君はいくら都会の伝統を嫌うような顔をしたって、底の底の方ではそれを肯定しぬいているんだよ。それは僕が疲れて来ると、北海道の海の荒い浪が見たくなったり、流木にたかって流れながら飛んでいる大きな鳥の群れが見たくなったりするのは少し違うかも知れないけれど……」

「違う……。断然違う……」
佳世は口惜しそうに言った。

「都会が故郷だってことは人間にとつて淋しい辛いことよ。人間の知恵がつくったものって、どんなに美しくつても心底から気持を楽にはしてくれないの……都会の持つ冷酷さがあなたには分らないのよ」

「まあ、喧嘩するのはやめようや」
と米良はおどけた調子で言った。

「今夜はせいぜい祇園囃子を享楽しましょう」

二人の織りこまれて進んで行く人波のさきには、明日の祇園会に十数台の山鉦の先頭に立って市内を練る長刀鉦が夜目にもくつきり竿頭の長刀のそりを見せて空に突立っていた。

破風造りの屋根の下の屋台に手摺一ぱいに乗りこぼれて、

祇園囃子の連中が笛、太鼓に鉦の交ったのんびりした囃子を合せている。

「鉦がはいるせいかなあ、この囃子のリズムは明るい中に余韻があるね」

「そうよ。だから『こんちきちん』の囃子だなんて、東京の人は景気が悪いみたいに言うわね」

「こんちきちんか、なるほどこんちきちん、こんちきちん……ちょっと狐に化かされてるような感じはあるね」

「でも聞きなれたものにはこのリズムがとてもいいのよ。さいていると、手足が自然に舞い出すようにたのしくって、あと、凄く淋しいの……」

「そうかなあ……僕たちにはのんびり明るい感じだけするけれどね」

米良はその時ふと組みあっている腕のびくりと動いたのに気づいて佳世の顔を見ると、群集の込んだ頭越しに長刀鉦の方へ向けている眼にはうっすり涙が光っていた。

「何か悲しい連想でもあるんじゃないか。祇園囃子に……」
米良はわざとそっぽを向いて気づかない風に言った。

「そうね。兄さんが出征したときのことなんかとつながっているかも知れないわね。私とは十幾つも違う上の兄さんよ。軍医で太平洋戦争の少し前に応召したんだわ。それが恰度このお祭の少しあつたので、兄さんに抱かれて宵宮を見てまわったの覚えているの……私、数えの六つぐら

いだったかしら、綺麗な着物着てるのがうれしくて、兄さんの腕の上でびよんびよん飛んでいたの」

「その兄さん、どうしたの……戦死でもしたのかい」

「ええ、そうよ」

佳世は何となく言葉を濁して、話を鉾の方へ外らした。

「ああいう鉾の前だの横だの、うしろだのに前掛けとか胴巻きとか見送りとかって名がついていて、ゴブラン織だのペルシャだの支那だの舶来織物や名高い画家の絵や西陣の綴れの錦が蔽いになっているのよ。夜だとよく分らないけれど、明日の本祭に、明るいところで見ると豪華なものだわ」

「そうだろうねえ。明日は天気でない困るね」

米良はやつとその時仰向いて空を見た。

「大丈夫、いい月だよ。今まで気がつかなかった」

「心配することはないわ。祇園祭に雨は降らないって京都の人は昔から信じこんでいるわ」

長刀鉾の立っている道の横の店屋の二階から囃子方の屋台へ臨時の橋がかかっていて、出入りする人の往来が芝居がかかって地上の見物から眺められた。

「あれを町家と言うのよ。昔はあそこの家があの鉾に使う宝物みたいなのを、みな預っていたんですって……今は火災にかからないような処に置いてあるらしいけれどね」

「おや、あそこに外人が立っている……橋の上から写真を

撮っているじゃないか」

米良の指さす橋の上の人出入りの間になるほど中年のアメリカ人の夫婦が立って、男の方が屋台に向けてカメラを眼によせていた。

「あら、本当ね。この頃の観光ブームで、祇園祭を見に来る外人は多いのよ」

「ウァンダフルって奴か」

米良がアメリカ人の発音を真似て、口を筒のように深くすぼめた時、同じ橋の上から、

「佳世さん、佳世さん」

とよく通る女の声が呼んだ。

「おや、君のことじゃないか」

「え、私？ だってこの人込みに……」

「佳世さん、町家の下までいらっしやい」

「そら、あの橋の上だ。今のアメリカ人の傍で手を振っている女の人だろう」

「誰かしらん……よく見えるわね」

「町家の前って言ったって、この列に入ってたんじゃないかなかぬけられないよ」

「そうよ、織機に整備された糸みたいなものだよ。いいわよ。誰だか知らないけど、このまんま通ってしまいましょうよ」

佳世が依怙地ではなくて、この織機からぬけ出すこ

とは全く不可抗力であった。橋の土の声さえ、人のざわめきと足音に押されて、いつか二人は橋の下を通りぬけていた。

「どんな恰好の女の人だった？」

と人波に押されて歩きながら、佳世がきいた。

「僕もよく解らなかつたけど……あの外人の夫婦と連れじやなかつたのかな。何だかあの二人とくっついて立ってたようだったよ」

「誰かしら」

佳世は声をかけられた時には半分分れて、見向こうともしなかつたのに、今になって気になる風に鉾の陰になった橋の方をふりかえった。

町の四つ角に提灯をふり照らした警官が幾人も立って、交通整理をしていた。そこで群集は違った方角へ散って行き、やっと二人は離れて歩けるようになった。

「こう混んでは宵山見物も楽しいやないな」

「新町から室町の方へ入りましょう。あっちにも山はあるけれど、ここみたいに混雑してはいないわ」

佳世は案内顔に先へ立って大通りを折れた。

米良には京都の町の名も方角もまるで解らない。佳世が歩いて行くままに夜の町々を並んで行くのだが、東京や大阪に較べると、灯の少ない格子造りの屋並みに、今夜は大通りから別れた人群れが三人五人つながって下駄の音をさ

せて歩いて行く。浴衣に団扇を持った若い男の多いのも米良には珍しかった。

ところどころに提灯の杉なりに灯してある飾りもあり、山（鉾が車で引くのに、これは人形をのせた台を人が担ぐ）も、いくつか飾られているのを見たが、囃子のないせいか人立ちは大してしていない。

夜店の出ているところもあった。暗い家並みの前で線香花火や玩具の熊などを売っている露店にアセチリン・ガスの灯が点っていて、鼻を刺すような強い匂いがして来た。

「久しぶりだな、この匂い嗅ぐの」

と米良は言った。

「ほんとうに……」

と言いながら、佳世はくんくん小鼻を動かしてその匂いを嗅いだ。

「君、好きなの……アセチリン」

「ううん、大嫌いよ。中学校の時分、大嫌いな先生に私一人でアセチリン・ガスって渾名つけていたくらい……」

「君もそうか……僕は匂いって、一番過去の記憶を呼び起す力を持つてると思うな」

「匂いと歌……」

「それ先刻の祇園囃子のこんちきちんが、私に子供の時のこと思い出させるのも同じよ」

「そうだな、僕もあの戦争の終り頃の杉の子の歌なんかを

歌うと、途端にあの時分のこと思ひ出すものなあ……」

「あ、ここだわ……ここは霞天神山……ちょっと変つて
いるの……入つて見ましよう」

佳世は賑やかな通りに出たところで話をとめて家と家の
間の底間に細長く開いている露地に歩み入つて行つた。ぞ
ろぞろ人の列がつづいていた。

「この先が霞天神の祭である町家なのよ。霞天神ついで
うのは、昔、このあたりに大火事のあつた時に、霞が降つ
て火を消した時に一緒に三穂ぐらゐの天神様の像が降つた
つていうんでそれを祭つたんですつて……ね、そら、そこ
の家の奥に天神様のお宮があるでしょう」

「お宮ついても普通の家の中にあるんだね。へえ変つ
ているなあ」

米良は露地の行きどまりの可成り広い間口の畳敷の奥に
縄を張つた小さいお宮や紅白の梅の造り枝が飾つてある
のを人のうしろから見たが、それよりも米良の眼に可愛ら
しく触れたのは、部屋の前の方に金屏風を立ててその前に
行儀よく膝を揃えて坐り、歌うように口々に声を張つてい
る子供の姿であつた。

男の子も一人二人交つていたが、六、七人目白押しに並
んでいるのは花模様の浴衣を着た七、八つから十ぐらゐま
での女の子である。京都の町中の娘らしく身体つきの華奢
なやさしい顔立ちの少女達は前に乾らびた笹の粽とお守、

蠟燭などを並べて、小鳥のように歌っている。

御信心のお方様は

蠟燭一丁お献じなされましよう

厄除け火除けのお守を

受けてお帰りなされましよう

常は出ませぬ

今日明日ばかり

御信心のお方さまは

受けてお帰りなされましよう

歌のような呼びかけの言葉はどこで初まつてどこで終
るのか、恐らく歌っている当人達にも解らないのではないか
と思われる単調な節を少女達はきちんと手を膝に揃え朗読
するように繰りかえしていた。

金屏風の横に参詣人の上げた蠟燭の沢山灯っている焰が
少女達の顔の薄い彫りを綺麗に照らしていた。

「何て言つてるんだらうね」

「蠟燭をお上げなさい。お守をお買いなさい」といふことよ。
私も昔、親類の呉服問屋の店で宵宮にお守や蠟燭を売
るのに行つたことあるわ。その時分には宵宮の晩には普段蔵つ
てある屏風だの、茶道具なんかを店へ出して、自慢に見せ
たものよ」

「そうか。君もあややって、蠟燭一丁お献じなされましょうってやったのか。可愛かったろうね」

「どうだか知らないわ。京都ってそういう風に小さい時から自分の姿が皆町の中に織りこまれていくから厭なのよ。私のうちなんか殊に没落して行った織元でしょう。華やかだった過去があるだけにそれがだんだんさびれて行って店を閉めたりするの思い出すのって辛いものよ」

佳世がしんみり言った時、うしろからそっと肩を抑えて、「今度は掴まえたわ。佳世さん……さっき長刀鉾のところから呼んだでしょう」

と綺麗に通る声で言った。米良がふり向いて見ると、首筋のすっきり美しい女の横顔が肩越しに佳世をのぞきこんでいた。翡翠の滴りそうな緑の指輪を指した白い指が佳世の肩をピアノでも弾くように弾いている。

「あら！ 三千子さんだったの……誰だか町家の橋の上から私を呼んでいるとは思ったけれど、あの混雑でしよう。出ぬけられるものじゃないの」

佳世は驚いた風もなく、大分年上の相手に遠慮なく口を開いている。親類か余ほど親しい仲の知人なのだろうと米良は思った。

霞天神の祭ってある露地をひきかえして通りへ出たところで、佳世は米良と三千子を引合せた。三千子は今は東京近郊に工場を持っている有名なリース会社の社長夫人なの

だが、生家が帯地の問屋で佳世の家と親しかったので小さいときから姉か従姉のような附合い方をして来た。

和服デザイナーという数の少ない染色の仕事をはじめている佳世にとって、自分の意匠した着物を身につけてくれる一番満足して眺められる着手は三千子なのであった。三千子は佳世のデザイナーした和服に値段の文句をつけない上に、五尺三寸を少し越す均整のとれた長身で、殊に首の長く肩の線の優雅になだらかなのが、どんな色、どんな模様をもって行っても、着負けするということのない、天成のボディなのである。それに京都生れの二人には、和服の生地や色、模様などに対する共通した鑑賞眼のあることも、一枚の着物をつくり上げる上に以心伝心の助けになった。佳世は今、新橋に近い個人呉服店の専属になっているが、パーティなどに着て出た菅野三千子の着物が縁になって佳世を名ざしの何人もの顧客を持つようになっていた。

米良もこの準スポンサー的な夫人の名はかねて、佳世からきいていたが、引合わされてみると、佳世と十以上年上というにしては思いの外若く、娘らしさのある感じが人達

「さっきはね。うちの取引先のアメリカ人の御夫婦を案内していたの。祇園会を見たいって言うんで京都ホテルに泊っているのよ。私はあの長刀鉾の町家を知っているでしょう。あそこの棧橋まで連れて行ったら、お囃子の連中を写

真に撮りたいってカメラを向けたのよ。ライトをつけた光子に下を歩いて行く人の中に偶然佳世さんの仰向いている顔がばあっと入ったの、……それでつい大きな声出して……あとではずかしかったわ」

三千子は飾りつけないローンのワンピースを着て、象牙色の薄べったいハンドバッグを腕にかけていた。白粉気のない黄味のある顔に銹朱色の口紅をうすくさしているのが、パーマネットしないで頭の上に引きつめて巻いた鬘の感じと交りあって中国も北京型の美人を思わせる優雅な印象を与えた。

「米良さんのこと、よく佳世さんが話すので知っていますわ……水泳がお得意なんですってね……海の底に魚や海草の動いている色は天然色映画なんぞとは絶対に違う……染色の参考になるから潜水服着てもぐれって佳世さんにおっしやっただんですってね」

「いやだなあ……つまらないお喋りして……」

米良は苦笑して足もとの小石をけつていた。

「佳世さんは叔父さまのところへ泊っているんでしょ。よくお店の休暇がとれたわね」

冷房のある喫茶店を探して、やっと三人腰を落ちつけた

あとで、三千子がきいた。佳世がその店の技術部で最も有能な職員であるために、いつも忙しいのを三千子は知っているのである。

「ええ、この秋、フランスへ行く日本舞踊の方で万寿院の襖の竹と雲を模してほしいって依頼があったの……恰度いい幸いにして、四、五日出て来たのよ」

「そうか、そらよかったなあ……」

三千子はちょっと京言葉に戻って、サレムをケースから一本ぬき出してくわえた。

「米良さん、この人忙しすぎて可哀そうよ。重宝がられるのは結構ですけど、一般向きの品となると、矢張り、値段とか、数を気にしなければ店の方は立ち行きませんものね。佳世さんの意匠でこの人自身の描いた作品としての着物を買ってくれるお客が極ればいいんだけど……」

「まだ、それには年数が要るなあ……僕達の仕事だってそうなもの……一人前に自分も仕事が出来ると、人に指図も出来るっていうのには十年はかかるんじゃないですか」

米良は少年じみた顔の癖に仕事のことになると、急に大人っぽい口つきでものを言った。仕事に身を入れている男の眼が生きてくるのである。三千子はちょっと驚いた風に米良を見たが、

「いいわね。佳世さん、いいお友達ね」

と佳世の方を見て言った。

「ええ、男友達ってやっぱりいいところあるのよ。ずけずけ物をいうからよく喧嘩するけれど、女同士より後味がいいのね。この人なんか人を怒らせるようなことばんばん言っ

て置いて、その次会うとけろりつと忘れてるんですもの……」

「だってね、佳世さん……君なんか本当は忙しいとか給料が勘ないとかいするのは贅沢なんだけ。丸藤じゃあ、君は今そんなに若い癖に一番重要なスタッフじゃないか。おれなんか見ろよ。そりゃこの頃の新築ブームで、給料はいいよ。だけど富塚工場のスタッフとして見りゃ、せいぜい角力の十両にも行ってやしない……僕はしかしそれでいいと思ってるよ。下積みの仕事のちゃんとして出来ぬ奴が背のびばかりして見たって結局自信のある仕事は出来ないからね」

「あなた、なかなか頼もしいのね。仕事のこととはやっぱりそういう風にロングランに考えるのが本当だと思わ、私は……」

三千子は感心したように米良をみたが、米良はけろりとして、

「僕には現代のスピード感覚がないって、仲間が言いますよ」

と言った。

「菅野さん御一緒じゃないの？」

佳世はメロン・シャーベットの青い艶のない丸みを匙で崩して唇へ運びながらきいた。

「主人？ ううん、今香港へ行ってるの」

「あらそう……いつお発ちだったの」

「一週間前よ。印度やジャワをまわって月末には帰ってくるでしょう。うちのレースは東南アジアによく出るから年に一、二度は出かけて行くわ」

「奥さんも外国へいらっしやることあるんですか」

と米良がきいた。

「アメリカとヨーロッパに一度連れて行って貰いました。新婚旅行みたいなものでしたけどね……」

「凄えなあ」

と米良は大きな声で言って、

「いつごろ」

ときいた。

「四年……いえ、もう五年になるかしら、菅野と私、結婚したのは昭和三十一年……佳世さん、たしかその頃ね」

「ええ、そうよ。私が美術大出る前々の年ですもの……」

「米良さん、私、後妻なのよ、菅野は一度結婚して前の人に死なれたの……もう高校へ行く娘がありますわ。私と主人とは随分年が違うのよ」

米良はげんな顔でこの美しい夫人の打明け話をきいていた。後妻とか年の違う夫とか高校に行く継娘とかの実態が、米良には一向しっくり頭に入って来なかった。

「亜矢ちゃん、連れていらっしやらなかったのね」

と佳世がきいた。亜矢というのは三つになる三千子の実子だった。